



# 園長だより NO80

## つくるということ

子どもたちの生活になかには「つくる」ことが不可欠、生活の中には創造することが日常のいたるところで見られます。

家庭生活中で空き箱は廃棄されてしまうもの（一部リサイクルするものもあるが）、ほとんどが可燃物として収集され焼却されてしまう、熱などの再利用で社会に還元されることもあるが空き箱は悲しんでいるだろう。

保育園には毎日、コツコツと家庭から空き箱が子どもの手により運ばれる、お菓子の小箱、牛乳パック、トレー、乳製品の容器等々、なぜ毎日コツコツ運んでくるのだろうか・・・

(※空き箱、廃品、ガラクタなど様々な呼び名があります)

## 空き箱製作の魅力

一見役に立たない空き箱も子どもの手にかかれば輝いて見える、ごみとして役目を終えてしまう空き箱も子どもにすれば「光る原石」である。

昨年みられた光景である。4歳児のA君が牛乳パックを何個もつなげて電車をつくる。テープがまだ思うように使えないがなんとか数個の牛乳パックをつなげる。既成のトミカのプラレールも子どもたちには大人気だが牛乳パックの電車も負けてはいない。なぜなら自分の手で作ったものだからである。不慣れたテープに悪戦苦闘しながらの取り組みに



出来上がった瞬間の達成感は格別なのである。

A君は頭の中をぐるぐると回転させ自分の思いに近づけようとその時に持っている技術を使い、工夫して作っている（創る）。



格闘すること数十分「新幹線はやぶさ」ができた大喜び、はたから見ると新幹線には見えないが取り組んでいる過程を見ているだけに本物以上の出来である。

しばらくすると緑色のラインを入れようとする。色鉛筆でぬり始めるが牛乳パックには思うように塗れない、大人がマジックなどを提示してしまえばいとも簡単に塗れるがひとまず色鉛筆を使い塗ってみる。うっすらと緑色が牛乳パックにつく程度であったがA君には納得の出来である。

その後は、保育室中をぐるぐると走らせ遊ぶ。

工夫し創造する。空き箱製作の魅力はここにあるのかな、自らの意思で素材を選択し創造してつくること、玩具メーカーから出されている既成の玩具や半完成品の玩具とは異なり自らの思いで素材を選び、自分が思い描いているように創造してつくる。

## 1年後の成長

遊びの中につくるのが当たり前にある毎日、空き箱や素材と向き合い、道具を使い製作する。空き箱のほかに木材を利用したり、年齢が上がれば、素材の選定も豊富になる。

前年度、牛乳パックをつなげ電車をつくっていた子ども達は腕前をあげていく、「車をつくろう」ということになる。実際に走るものを作りたい。車輪があり車軸があり、道路の上

をしっかりと走ることができるもの、一年の積み重ねから道具の扱いも自分の思い描くように使えるようになる。はさみの扱いも堪能である。子どもなりにイメージ通り切り取ることもお手の物、没頭して作る子もあればあれこれと思いを伝えあい互いに工夫してつくる子どももいる。



## 遊びを豊かにする仲間関係

つくっている過程では仲間とのやり取りがある。製作しているものについてあれこれと思いを出し合い伝え合う。話し手がいて聞き手がいる。会話の成立であり、思いを受け止めてもらい、認めてもらえる機会ができる。



遊びながらも互いに肯定感を感じる、知恵を出し合い作っていると協同の作業も生まれる。今回の車づくりの発端は道路づくりから始まり、次に走らせる車を作ろうという発想につながる。ひとり、ひとりの思いがつながり合いながら協同の取り組みへと発展する。ひとりより

ふたり、二人よりもと人数が増えてくれば、それなりに会話も弾む、内容も創造性も豊かになっていく、結果、いろいろと付随したものを工夫して作り出す、信号、駐車場、等々

当然、遊びも豊かになる、豊かになると情緒も安定する。そんな経験の積み重ねから、子どもの生活（遊び）を自らが作ろうとする環境がおのずとできていく、便利な世の中が子ども本来の遊びを削いでしまっている現在に自分の意思で選んで創造的に製作できる空き箱は保育の中で貴重な遊びの素材となっている。



## 気持ちを受け止める

ご理解していただきたいな一と思うことがあります。大人からみたら単にガラクタの



に見えてしまうものですが子どもからすれば完成したものを家に持ち帰ることは胸をはり誇らしげなこと、「ねえ、ねえみてみて」と心が充足した姿なのです。

ただ毎日新幹線を持ちかえることになるかわが家が大変なことになることも重々承知しています。自分でつくり、自分の思い通りにできたものをお母さん、家族に見てもらいたい、そんな思いを受け止めてあげ寄りそってあげて下さい。（園長 廣部 信隆）